Bulletin of the Educational Research and Development, Faculty of Education, Kagoshima University
2005, Vol.15, 149-156

論 文

親の叱りことばの表現と子どもの受容過程に関する研究（Ⅱ）
～原因の所在に関する認知が受容過程に及ぼす影響を中心に～

松　田　君　彦〔鹿児島大学教育学部（教育心理学）〕・林　　紋　子〔垂水市立協和小学校〕

A Study on Types of Parent Scolding Utterances and Children Acceptance Process.（Ⅱ）
：Focusing on their Cognitive Causes Concerning the Locus of Control

MATSUDA Kimihiko・HAYASHI Ayako

キーワード：叱りことば、原因の所在、自己主張と受容、親の信念評価

Ⅰ．要　約

子どもが叱られる場面だけに注目するのではなく、その前後、つまり、叱られる様な事態に至った経緯、更には、叱られた子どもが示した反応に対して大人がどのように応答することが望ましいかということに焦点を当てた研究を行った。

その結果、叱られるような事態を招いた原因に関する認知が明確に現れるのは児童後期であること、子どもが自己責任を感じている場合では、親の叱り方にかかわらず、受諾反応が多く、また親の叱りの背景に肯定的な信念を感じ取る傾向が強いことが明らかになった。

Ⅱ．研究の背景と目的

松田・児嶋（2002）では、親の用いる叱りことばをいくつかのタイプに分類し、どのような叱り方が子どもに受容されやすいか、さらには、親の自分に対する日頃の関わり方を子ども自身がどのように認知しているかによって、同じ叱り方でも受け止め方に違いが見られるのではないかということを調べ、「人格評価」や「突き放し」といった叱り方は子どもに反発感情を生じさせるが、親との信頼関係の有無が重要な媒介変数であることが明らかになった。

これまでの叱り方に関する研究を概観してみると、子どもが大人に叱られた場面のみが注目されており、その前後、つまり、どのような経緯で子どもが叱られる状況に至ったのか、更には、叱られた子どもの反応に対する大人の対応がもたらす効果などに焦点を当てた研究は少ない。

そこで本研究では、親の叱りことばのタイプ、叱られる状況に至った原因の所在、子どもの発達段階（学年）、子どもの言い分に対する親の対応の仕方という４つの変数を設定し、まず、これらの変数が叱られたことに対する子どもの受諾、反発、自己主張といった反応にどのような影響を及ぼすかについて検討する。先の松田・児嶋（2002）の研究では、「親子間の信頼関係の有無」という変数を中心に検討したが、今回は「叱られる状況に至った原因の所在」に関する認知という変数を中心に検討する。これまでの諸研究から、このような原因の所在に関する認知能力は児童中期から後期にかけて発達すると考えられる。次に、叱られた子どもの言い分に対する親の対応（受容的態度の有無）によって、子どもは親が自分をどのような信念に基づいて叱っていると受け止めるのかということを検討する。

Ⅲ．研究方法

ここで、各変数の意味と具体的な測定法について説明する。

１．親の叱り方のタイプ

遠藤ら（1991）によると、親が子どもに対して使う叱りことばには様々な表現パターンがあり、その表現パターンの違いによって、状況は同じであっても、子どもの反応（受諾、反発、自己主張、受け流し）に違いが見られ、叱りことばの違いは単に字句の表現上の違いに留まらず、伝達される情報の内容が異なってくることが示唆された。本研究では、様々な叱りことばの表現パターンの中から、なぜその行為がいけないことなのかを子どもに伝える「理由明示的な叱りことば」

と、理由をまったく説明せず感情的に叱る「感情的叱りことば」の二つの表現パターンを取り上げた。これは、単に叱るだけでなく、その理由を言語的に明示することが子どもの納得（受諾反応）を促進するのに対して、理由を明示しない感情的な叱り方はその対極にあると考えられるからである。

2．原因の所在

これは、そのような事態を引き起こした原因が自分にある（自分のせいだ）と考えるか、自分にはない（自分とは無関係であり、不可抗力だ）と考えるかに関する要因である。

この要因は一般に、帰属後（原因を何処に求めたか）の感情と関連していることが指摘されている。原因は何であろうと、成功に対しては喜び、失敗に対しては悲しみという感情の動きがある。しかし、またそれとは別に、原因帰属に基づく感情の動きがある。例えば、成功や失敗が他者によるものだと、感謝とか恨みの感情が生じるし、運によるものだと驚きが生じる。そして、特に、自己に帰属させる場合に、コンピテンス（有能感）とか、誇りとか、恥とかいう自尊感情に関連する感情が生じる。叱られるような事態が自分以外のものによってもたらされたと思っている時に、理由も問わずに叱られれば、恨みの感情が生じるのも当然であろうし、「しまった。自分のせいでこうなった」と思っている時に叱られれば、恥とか反省の念も湧いてこよう。

3．子どもの発達段階（学年）

原因の所在に関する明確な認知能力（気づき）が児童中期から後期にかけて現れるという仮説、および設問への理解と回答能力を考えて、児童中期として小学校３・４年生（195名、男女ほぼ同数）、児童後期として小学校５・６年生（211名、男女ほぼ同数）という二つの年齢群を設定した。

4．親の信念評価

親は自分をどのような信念に基づいて叱っていると子どもが評価（認知）するか、ということを調べるための設問であるが、藤田・丸野（1992）を参考に、肯定信念：叱ることが子どものためになると考えているという認知、否定信念：叱ることで子どもに罰を与えたり困らせることができると考えているという認知、中立信念：単に子どもが行った行為が好ましくないことを伝えるために叱っているという認知の３つの選択肢を設定して選ばせた。

5．調査材料と調査手続き

子どもが母親に叱られている場面を設定し、３つの要因（１．叱られる場面に至った経緯：子どもに責任があると考えられるものと、子どもに責任がないと考えられるもの、２．親の叱りことば：理由明示的な叱りことばと、感情的な叱りことば、３．子どもの言い分に対する親のことば：受容的のものと、非受容的なもの）を組み合わせて８パターンの短いストーリーを作成し、それに対する子どもの反応を求めた。

次に示すストーリーは、子どもに責任有り・理由明示的叱りことば・受容的応答の例である。

たかし君は友だちにマンガをかりました。家に帰ってすぐに読もうと思っていたのですが、家に帰るとおもしろいテレビをやっていて、ついつい夢中になってしまいました。テレビをみてしまったので、マンガを読むのが夜遅くになってしまいました。そこへお母さんがやってきました。

お母さん：「あんまり夜おそくまでマンガを読んでいたら、明日の朝、寝坊してしまうから、もうやめなさい」

たかし君：「だってテレビがおもしろくって、見ていたら、マンガを読む時間がなくなっちゃたんだもん」

お母さん：「そう、ついついテレビを見ちゃったのね。マンガを読みたいきもちもわかるわ。楽しみにしていたのよね。でも、もうやめなさい。」

☆　もしあなたがたかし君なら、このあと、おかあさんにどんなことを思うと思います

か？　下のそれぞれの質問(しつもん)に、思う～思わないの５つから１つをえらんで◯をつけてください。

1．「わかった」と思う
2．「うるさいな」と思う
3．「ごめんなさい」と思う
4．「だってぼく（わたし）のせいじゃないもん」と思う
5．「そんな言いかたってないでしょう」と思う
6．「まだ　いいじゃない」と思う

☆　あなたは、たかし君のおかあさんは、どんな人だと思いますか？　次の３つの中から１つえらんで（　）に◯をつけてください。

（　　）たかし君が学校におくれないように心配(しんぱい)する、やさしい人だと思う
（　　）いつも注意(ちゅうい)ばかりする、おこりっぽい人だと思う
（　　）早起(はやお)きすることが好(す)きな、元気な人だと思う

各教室において、８パターンあるストーリーをランダムに配布し、児童一人が１つのストーリーについて回答するようにした。

５段階評定尺度に対する子どもの反応は、とても思う（５点）～ぜんぜん思わない（１点）として得点化したが、納得（１）謝罪（３）の合計点を受諾度得点、干渉拒否（２）相手の価値観や言い方への反発（５）の合計点を反発度得点、自己の正当性の主張（４）自己の欲求の主張（６）の合計点を主張度得点とした。

Ⅳ．結　果

１．受諾反応について

子どもが親から叱られる場面における受諾反応の各条件別平均得点と標準偏差を示したのがTable1-1で、学年、責任の有無、叱りことば、受容的応答の有無による４要因分散分析の結果を示したのがTable1-2である。

Table1-1　各条件別の平均受諾度得点と標準偏差

	理由明示的叱りことば		感情的叱りことば	
	受容あり	受容なし	受容あり	受容なし
	m（SD）	m（SD）	m（SD）	m（SD）
３・４年生				
責任あり	7.04(2.34)	7.61(2.19)	6.91(2.18)	7.05(2.17)
責任なし	7.61(2.21)	7.20(1.83)	7.19(2.47)	6.64(2.36)
５・６年生				
責任あり	7.15(1.69)	6.52(2.26)	7.26(1.99)	6.64(2.08)
責任なし	7.04(1.34)	5.50(2.04)	5.65(1.67)	5.64(2.00)

Table1-2　受諾度得点についての学年・叱りことば・責任の有無・受容の有無による４要因分散分析表

要因	SS	df	MS	F	
学年　（A）	51.296	1	51.296	12.063	**
叱りことば（B）	10.872	1	10.872	2.551	
責任の有無（C）	20.795	1	20.795	4.879	*
受容の有無（D）	14.053	1	14.053	3.297	＋
A×B	.637	1	.637	.149	
A×C	21.323	1	21.323	5.003	*
A×D	9.743	1	9.743	2.286	
B×C	4.684	1	4.684	1.099	
B×D	1.432	1	1.432	.336	
C×D	5.862	1	5.862	1.375	
A×B×C	2.115	1	2.115	.496	
A×B×D	6.716	1	6.716	1.576	
A×C×D	2.826	1	2.826	.663	
B×C×D	4.786	1	4.786	1.123	
A×B×C×D	2.295	1	2.295	.538	
誤　差	1585.484	372	4.262		

**p<.01　*p<.05　＋p<.10

Table1-2 の分散分析表からわかるように、受容的応答の有無の主効果に10%水準で有意な傾向が見られた（F=3.297, df=1/372, p<.10）。また、学年と責任の有無の交互作用が5%で有意だったので(F=5.003, df=1/372, p<.05)、各水準ごとに単純主効果を分析した結果、学年の単純主効果が責任なしにおいて0.1%水準で有意であり（F=16.503, df=1/372, p<.001)、５・６年生よりも３・４年生の方で受諾度得点が高かった。また、責任の有無の単純主効果を見てみると、５・６年生においては、子どもに責任がない場合よりも責

任がある場合に受諾度得点が有意に高かった（F=10.521, df=1/372, p<.01）。

2．反発反応について

子どもが親から叱られる場面における反発反応について調べた結果をTable2-1, Table2-2に示す。

Table2-1　各条件別の平均反発度得点と標準偏差

	理由明示的叱りことば		感情的叱りことば	
	受容あり	受容なし	受容あり	受容なし
	m（SD）	m（SD）	m（SD）	m（SD）
3・4年生				
責任あり	5.30(1.89)	5.43(2.23)	6.64(2.36)	6.68(1.97)
責任なし	4.48(2.33)	5.20(2.10)	5.96(2.29)	6.36(2.15)
5・6年生				
責任あり	5.54(1.84)	6.28(1.70)	5.19(2.69)	5.89(2.51)
責任なし	6.24(1.33)	6.54(2.49)	6.17(1.99)	6.52(2.02)

Table2-2　反発度得点についての学年・叱りことば・責任の有無・受容の有無による４要因分散分析表

要因	SS	df	MS	F	
学年（A）	7.988	1	7.988	1.723	
叱りことば（B）	29.132	1	29.132	6.285	*
責任の有無（C）	.406	1	.406	.088	
受容の有無（D）	17.326	1	17.326	3.738	+
A×B	55.053	1	55.053	11.877	**
A×C	32.237	1	32.237	6.955	**
A×D	.942	1	.942	.203	
B×C	.782	1	.782	.169	
B×D	.227	1	.227	.049	
C×D	.030	1	.030	.006	
A×B×C	.524	1	.524	.113	
A×B×D	.260	1	.260	.056	
A×C×D	4.602	1	4.602	.993	
B×C×D	.036	1	.036	.008	
A×B×C×D	.152	1	.152	.033	
誤差	1724.330	372	4.635		

**p<.01　*p<.05　+p<.10

Table2-2の分散分析表にあるように、受容的態度の有無の主効果に10%水準で有意な傾向が見られた（F=3.738, df=1/372, p<.10）。また、学年と叱りことばの間に有意な交互作用が認められた（F=11.877, df=1/372, p<.01）ので単純主効果検定をおこなったところ、学年の主効果が理由明示的叱りことばにおいて１%水準で有意であり（F=11.522, df=1/372, p<.01）、３・４年生よりも５・６年生の方が反発度得点が高かった。また、叱りことばの単純主効果が３・４年生において0.1%水準で有意であり（F=16.850, df=1/372, p<.001）、３・４年生では理由明示的叱りことばよりも感情的叱りことばの方が反発度得点が高いことが明らかになった。さらに、学年と責任の有無の交互作用が１%水準で有意であった（F=6.955, df=1/372, p<.01）ので各水準で単純主効果を分析したところ、学年において１%水準で有意反応が見られ、責任なしの場合に３・４年生よりも５・６年生のほうが反発度得点が高かった（F=7.908, df=1/372, p<.01）。また、責任の有無の単純主効果が５・６年生において有意であり（F=4.580, df=1/372, p<.05）、責任無しの場合の方で反発得点が高かった。

3．主張反応について

親から叱られる場面における子どもの主張反応に関する結果をTable3-1, Table3-2に示す。

Table3-1　各条件別の平均主張度得点と標準偏差

	理由明示的叱りことば		感情的叱りことば	
	受容あり	受容なし	受容あり	受容なし
	m（SD）	m（SD）	m（SD）	m（SD）
3・4年生				
責任あり	5.91(2.11)	5.00(2.63)	6.36(2.32)	5.32(2.00)
責任なし	5.13(2.36)	6.04(2.28)	5.85(2.59)	6.05(2.13)
5・6年生				
責任あり	5.85(2.01)	6.32(1.65)	4.93(2.07)	5.79(2.20)
責任なし	6.12(1.83)	6.50(2.44)	6.78(2.26)	5.56(2.12)

Table3-2　主張度得点についての学年・叱りことば・責任の有無・受容の有無による４要因分散分析表

要因	SS	df	MS	F	
学年　（A）	7.179	1	7.179	1.481	
叱りことば（B）	.090	1	.090	.019	
責任の有無（C）	9.803	1	9.803	2.022	
受容の有無（D）	.196	1	.196	.040	
A×B	15.573	1	15.573	3.212	+
A×C	3.920	1	3.920	.809	
A×D	2.710	1	2.710	.559	
B×C	1.925	1	1.925	.397	
B×D	6.386	1	6.386	1.317	
C×D	1.199	1	1.199	.247	
A×B×C	2.245	1	2.245	.463	
A×B×D	.207	1	.207	.043	
A×C×D	41.348	1	41.348	8.528	**
B×C×D	9.877	1	9.877	2.037	
A×B×C×D	3.000	1	3.000	.619	
誤　差	1803.534	372	4.848		

**p<.01　+ p<.10

分散分析の結果、学年、責任の有無、受容的応答の有無の３要因間に有意な交互作用が見られた(F=8.528, df=1/372, p<.01)。そこで、学年ごとに叱りことば、責任の有無、受容的応答の有無の３要因による分散分析を行ったのがTable3-3である。

(1) ３・４年生における主張度得点の分析

Table3-3　３・４年生における主張度得点についての学年・叱りことば・責任の有無・受容の有無による４要因分散分析表

要因	SS	df	MS	F	
叱りことば（A）	6.279	1	6.279	1.163	
責任の有無（B）	.626	1	.626	.116	
受容の有無（C）	2.060	1	2.060	.381	
A×B	.006	1	.006	.001	
B×C	26.738	1	26.738	4.952	*
A×C	2.026	1	2.026	.375	
A×B×C	.940	1	.940	.174	
誤　差	944.930	175	5.400		

*p<.05

Table3-3からわかるように、責任の有無と受容的応答の有無の２要因間に５％水準で有意な交互作用がみられた(F=4.952, df=1/175, p<.05)ので、単純主効果検定をおこなったところ、受容的応答がない場合に、責任の有無の単純主効果が有意な傾向(F=3.216, df=1/175, p<.10)がみられ、責任無し群の方で主張度得点が高かった。また、責任有り条件で、受容的応答の有無の単純主効果に有意な傾向がみられ(F=3.867, df-1/175, p<.10)、受容的応答有りの場合に主張度が高かった。

(2) ５・６年生における主張度得点の分析

分析の結果、Table3-4に見られるように、責任の有無と受容的応答の有無の両条件間に有意傾向の交互作用がみられた(F=3.470, df=1/197, p<.10)。

そこで、水準ごとに単純主効果を分析したところ、受容的応答有り条件で、責任有り群よりも責任無し群のほうで主張度得点が高かった(F=6.558, df=1/197, p<.05)。

Table3-4　５・６年生における主張度得点についての学年・叱りことば・責任の有無・受容の有無による４要因分散分析表

要因	SS	df	MS	F	
叱りことば（A）	9.578	1	9.578	2.198	
責任の有無（B）	13.880	1	13.880	3.185	+
受容の有無（C）	.770	1	.770	.177	
A×B	4.425	1	4.425	1.015	
B×C	15.124	1	15.124	3.470	+
A×C	4.727	1	4.727	1.085	
A×B×C	12.627	1	12.627	2.897	
誤　差	858.604	197	4.358		

+ p<.10

４．信念評価について

子どもの反応に対する母親の応答が受容的である場合とそうでない場合で、母親の信念に対する子どもの評価（肯定・否定・中立）に違いがみられるかどうかについて、責任の所在（責任有り・無し）と叱りことばのタイプ（理由明示型、感情型）の条件別に分析した結果、有意な差がみられたのは次の場合だけであった。

(1) 責任無し・理由明示的叱りことば条件

子どもに責任がなく、親の叱りことばが理由明示的である場合において、親の信念への子どもの

評価に有意な差がみられた。

Table4-1　受容の有無と信念評価パターンとのχ_2検定結果

	肯定	否定	中立	χ^2値
受容あり	43(89.6)	3(6.3)	2(4.2)	7.033 *
受容なし	35(70.0)	13(26.0)	2(4.0)	

（ ）内の数字は%　　*p<.05

χ^2検定の結果、信念ごとに評価した人数に有意な偏りがみられたので、残差分析をおこなった結果が次のTable4-2である。

Table4-2　受容の有無と信念評価パターンとの残差分析の結果

	肯定	否定	中立
受容あり	2.40 *	−2.64 *	0.04
受容なし	−2.40 *	2.64 *	−0.04

*p<.05

これより、子どもに責任がなく、叱りことばが理由明示的である場合には、母親の応答が受容的であると、非受容的な場合に比べて母親に肯定的信念を感じ取る者が多くなるが、母親の応答が非受容的な場合には、母親に否定的信念を感じ取る者が多くなるといえる。

(2) 責任無し・感情的叱りことば条件

上記の条件下での受容的応答の有無による信念評価の分布をχ^2検定した結果が次のTable4-3である。

Table4-3　受容の有無と信念評価パターンとのχ_2検定結果

	肯定	否定	中立	χ^2値
受容あり	41(82.0)	6(12.0)	3(6.0)	6.012 *
受容なし	29(60.4)	15(31.3)	4(8.3)	

（ ）内の数字は%　　*p<.05

Table4-3を残差分析した結果をTable4-4に示す。

Table4-4　受容の有無と信念評価パターンとの残差分析の結果

	肯定	否定	中立
受容あり	2.36 *	−2.32 *	−0.45
受容なし	−2.36 *	2.32 *	0.45

*p<.05

子どもに責任がなく、叱りことばが感情的である場合においては、受容的な応答条件の子どもは非受容的な応答条件の子どもより母親に肯定的信念を感じ取る者が多く、逆に、非受容的な応答条件の子どもは受容的な応答条件の子どもより否定的信念を感じとる者が多いといえる。

V．考　察

1．受諾心について

受諾度得点について、学年・叱りことばのタイプ・責任の有無・受容的応答の有無による4要因分散分析を行ったところ、学年と責任の有無の交互作用が有意であり、５・６年生では叱られたことについて責任がある場合は、責任がない場合よりも受諾得点が有意に高くなり、また、子どもに責任がないばあいにおいてのみ、３・４年生のほうが５・６年生よりも受諾得点が高くなるという結果が得られた(Fig. 1)。

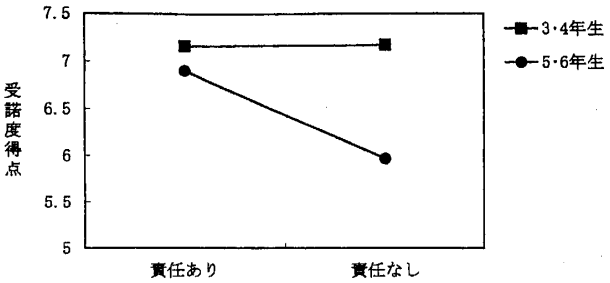

Fig. 1　責任の有無における学年ごとの平均点

叱りことばに関しては、主効果も交互作用も見られず、「理由明示的な叱りことばの方が感情的な叱りことばよりも受諾得点が高くなるだろう」という仮説は支持されなかった。

Fig. 1に見られるように、３・４年生では責任の有無による受諾度得点に差は見られないが、５・６年生になると責任の有無による受諾度得点に差が見られ、責任がある場合に受諾度得点が高

くなっている。これは仮説と一致しており、５・６年生になると“責任の所在”に関する認識が明確に育ち、自分に責任がある場合についてのみ、叱りを納得できるという感情が働いた結果であろうと思われる。

また、責任がない場合においては、５・６年生よりも３・４年生の方が受諾度得点が高くなっている。つまり、３・４年生の子どもは５・６年生の子どもに比べて、たとえ自分に責任がなくても、親から叱られたことを受け入れてしまうという傾向にあるといえる。これは、３・４年生の子どもがいわゆる権威主義的道徳期から未だに抜け切れていないこと、および、“責任の所在”に関する認識が十分には育っていないことに理由があるものと思われる。

２．反発心について

反発度得点について、学年・叱りことばのタイプ・責任の有無・受容的応答の有無による4要因の分散分析をおこなったところ、学年と責任の有無の要因間に有意な交互作用が認められ、３・４年生では責任の有無で反発度得点に有意な差は見られないが、５・６年生では叱られたことについて子どもに責任がない場合は、責任がある場合よりも反発度得点が有意に高くなるという、仮説通りの結果が得られた(Fig. 2)。

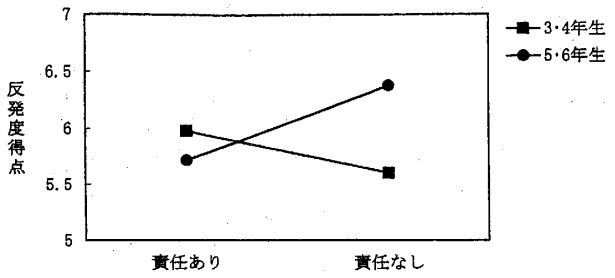

Fig. 2　責任の有無における学年別平均得点

また、責任がない場合において、３・４年生よりも５・６年生の方で反発度得点が高いという結果も、先の受諾度得点の場合の逆で、当然予想されるものである。

学年と叱りことばの２要因間に有意な交互作用が見られ、３・４年生では叱りことばのタイプによって反発度得点に差が見られ、理由明示的な叱り方よりも感情的な叱り方で反発心が強く現れ、予想通りの結果であったが、５・６年生では叱り方のタイプによる反発度得点には差がみられず、予想外の結果であった(Fig. 3)。

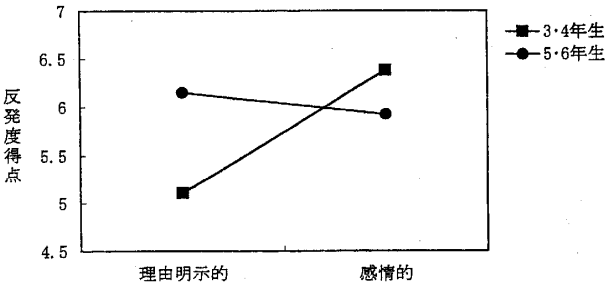

Fig. 3　叱りことばにおける学年別平均得点

３．主張心について

ここでも４要因による分散分析を行ってみたが、学年・責任の有無・受容的応答の有無の３要因間で交互作用が有意だったので、学年別に下位検定を行った結果について考察する。

(1)　３・４年生における主張度得点の分析・考察

責任の有無と受容的応答の有無の交互作用が有意であり、親の応答が受容的でない場合に責任なし群の方が責任あり群よりも自己主張的であり、３・４年生段階でも責任の所在に関する認知が既に現れていることを示唆している。また、責任が子どもにある条件において、親の態度が受容的であるときに主張心が高くなるという結果は仮説に反するものであった。

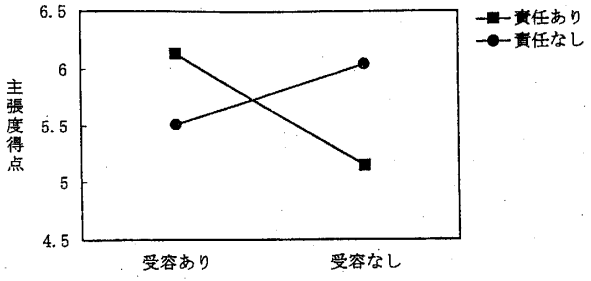

Fig. 4　受容の有無における責任の有無ごとの平均得点

(2)　５・６年生における主張得点の分析・考察

責任の有無・受容的応答の条件間で有意な交互作用が見られたので下位検定を行った結果、親の応答が受容的な条件でのみ、責任の所在に関する子どもの認知の違いで有意差がみられた、子どもが自分に責任があると認知している場合よりも責

任がないと認知している場合に主張的反応は高かった。これは予想通りであるが、親の応答が受容的でない場合には、責任の有無に関する認知と主張反応の間に何の関係も見られなかったことは予想に反する結果であった。

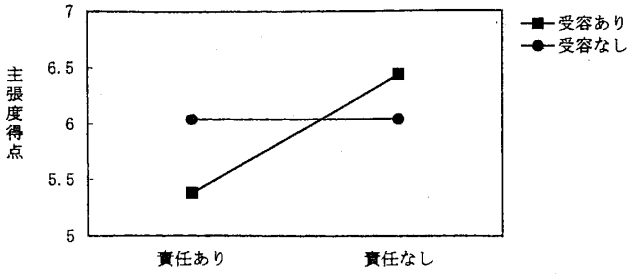

Fig5.　責任の有無における受容の有無別の平均得点

4．信念について

子どもは自分が叱られたとき、親はどのような信念に基づいて自分を叱っていると感じているのであろうか。ここでは、そのような親の信念を評価する際に、親の叱り方に受容的な態度がある場合とない場合、さらには、叱られるような事態に至った経緯に自分の責任を感じる場合と感じない場合の違いが、どのような影響を及ぼすかを調べた。その結果を示したのがFig. 6、Fig. 7である。

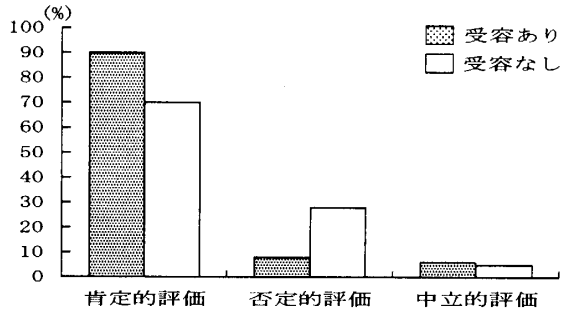

Fig. 6　受容的態度の有無と信念評価（責任なし・理由説明的叱りことば条件）

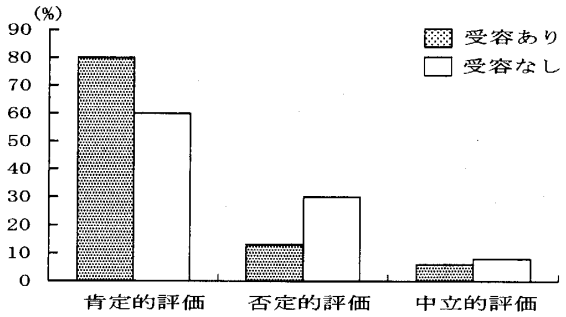

Fig. 7　受容的態度の有無と信念評価（責任なし・感情的叱りことば条件）

見てわかるように、親の叱りに肯定的信念を感じるのは、その叱り方に受容的な態度が含まれているときが有意に多かった。反対に、否定的な信念を感じるのは、受容的な態度が含まれていない場合が有意に多かった。つまり、親が子どもに対して「あなたの気持ちはよくわかるのよ」という態度を示した場合に、親は自分のために叱ってくれているのだと、親の信念を肯定的に評価する子どもが多くなるのに対して、そういった態度を示さないと、親は自分のために叱ってくれているのではなく、ただ自分を罰するためにだけ叱っているのだと、親の信念を否定的に評価する子どもが多くなるのである。また、親の叱り方によって親の信念評価にこのような差がみられるのは、子どもがその事態に責任を感じていない場合においてのみであることにも注意する必要がある。つまり、このような事態になったのは自分の責任ではない、だから叱られるのは理不尽である、と感じている場合だけなのである。子どもも高学年になると、責任の所在に関する認識が明確に育ってくることから、自分の正当な言い分に対して親がどのように対応するかが、親の信念評価にはっきりと影響してくるのである。

参考文献

1．遠藤由美・吉川佐紀子・三宮真知子　1991　親の叱りことばの表現に関する研究　教育心理学研究　第39巻　第1号　85-91

2．藤田敦・丸野俊一　1992　親の叱りことばの受容過程における子どもの状況認知の役割　九州大学教育学部紀要（教育心理学部門）第37巻　第2号　133-142

3．松田君彦・児嶋晃代　2002　親の叱りことばの表現と子どもの受容過程に関する研究(1)　鹿児島大学教育学部研究紀要　第54巻